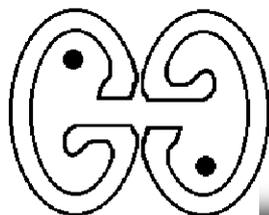


日本双生児研究学会ニュースレター

《第62号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2017年7月発行



目次

- ・学会報告
 - 2016年度日本双生児研究学会奨励賞授賞 受賞講演の記録 2
 - 「認知機能と食品・栄養素摂取量の関連に関する成人双生児研究」
 - 尾形 宗士郎（国立循環器病研究センター，循環器病統合情報センター）
 - 日本双生児研究学会 第31回学術講演会 シンポジウム記録 4
 - 「当事者が参加する学会の強みを生かして」
 - 大木 秀一（石川県立看護大学 健康科学講座）
- ・寄稿
 - 「これからの『双生児学』について－会長就任に寄せて－」 9
 - 安藤 寿康（慶應義塾大学 文学部）
- ・日本双生児研究学会第37回学術研究会のご案内 12
- ・日本双生児研究学会第32回学術講演会のご案内 13
- ・総会・幹事会報告 14
- ・2017年度日本双生児研究学会奨励賞受賞候補者推薦方法について 17
- ・会員用新メーリングリスト運用開始のご案内 18

編集後記

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号（00910-2-253840）、加入者名（日本双生児研究学会）をご記入の上、年会費（3,000円）をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒929-1210 石川県かほく市学園台1-1

石川県立看護大学 健康科学講座

日本双生児研究学会事務局（大木秀一）

TEL & FAX : 076-281-8377

E-mail : sooki@ishikawa-nu.ac.jp

2016年度日本双生児研究学会奨励賞授賞 受賞講演
『認知機能と食品・栄養素摂取量の関連に関する成人双生児研究』

尾形 宗士郎

国立循環器病研究センター，循環器病統合情報センター

Introduction

認知機能低下の予防・治療を有効に実施するには、明白な認知機能障害が生じる前にアプローチを実施する必要があると考えられる。本研究は認知症・軽度認知障害に先立って低下する認知機能である短期記憶に着目した。短期記憶とは短期間使用可能な状態で少量の情報を保持する能力であり、人間活動の中心的な認知機能の一つである。

認知機能低下予防のため、修正可能なライフスタイルである食品摂取・栄養素摂取に着目した。そのなかでも、先行研究にて認知機能と関連があると報告のあった、乳製品摂取量と抗酸化物質摂取量に着目した。抗酸化物質の例として、ビタミン C、ビタミン E、 α カロテン、 β カロテンといったものがある。

乳製品摂取と抗酸化物質摂取は心血管病のリスク軽減を通して、認知機能低下リスクを軽減すると考えられている。しかし、それらの関連について先行研究の報告は一致していない。加えて、食品摂取と認知機能はそれぞれ遺伝要因の影響を受けているので、乳製品摂取及び抗酸化物質摂取と認知機能の関連には遺伝要因が関わっている可能性が考えられ、遺伝要因を考慮したうえでその関連を検討する必要がある。しかし、遺伝要因を考慮したうえで、乳製品摂取及び抗酸化物質摂取と認知機能の関連を検討した先行研究は見当たらなかった。

そこで、遺伝・家庭環境要因を考慮したうえで関連を検討できる双生児研究法に着目した。通常の疫学研究では対象者ごとに遺伝要因が異なる。そのため認知機能のリスクとなる環境

要因を示唆しても、認知機能の個人差は示唆された環境要因によるのか、遺伝要因によるのか不明である (図 1)。遺伝要因を共有する一卵性双生児ペアを比較することにより、遺伝要因を調整した上で、環境要因の違いが認知機能の個人差と関連しているのか検討可能となる (図 1)。つまり遺伝・家庭環境要因に関わらない認知機能と関連のある環境要因が特定可能となる。以上のことから、成人双生児ペアを対象とし、遺伝・家庭環境要因の調整前

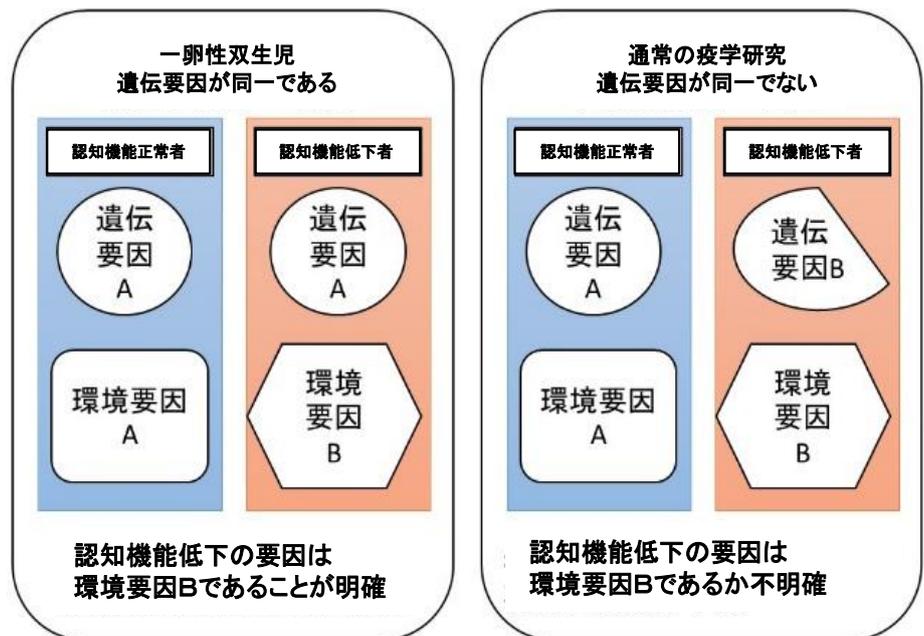


図1 双生児研究の原理

後にて乳製品摂取量及び抗酸化物質摂取量と短期記憶の関連を検討した。

Methods

大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンターが把握する成人双生児ペアのうち認知機能検査に参加した 20–75 歳の者を対象とし、横断研究を実施した。短期記憶は Wechsler Memory Scale–Revised の Logical memory I (LM I) で評価した。乳製品摂取量と抗酸化物質摂取量は簡易型自記式食事歴法質問票で評価された。抗酸化物質としてビタミン C、ビタミン E、 α カロテン、及び β カロテンの摂取量を検討した。調整変数として性別、年齢、教育歴、婚姻状況、現在の喫煙状況、body mass index、アルコール摂取量、高血圧および糖尿病の既往歴を使用した。双生児ペアの特性を活用せず双生児ペアを一般集団として扱う解析は、一般化推定方程式及び一般化線形混合モデルにより実施した。双生児ペアの特性を活用し遺伝・家庭環境要因を調整する解析は、双生児ペアの差を用いた重回帰分析により実施した。

Results

乳製品摂取と短期記憶の関連における結果は下記の通りである。男性 78 名（平均年齢±標準偏差 52.65±16.86 歳）、女性 278 名（平均年齢±標準偏差 45.23±15.04 歳）が対象となった。男性において、乳製品摂取量が多いものは有意に短期記憶が高得点であることが示され（標準化回帰係数 = 0.22; 95% 信頼区間, 0.06–0.38）、その関連は遺伝・家庭環境要因を調整した後も同様であった（標準化回帰係数 = 0.38; 95%信頼区間, 0.07–0.69）。女性において、乳製品摂取と短期記憶に有意な関連はみられなかった。

抗酸化物質摂取量と短期記憶の関連における結果は下記の通りである。解析対象者は 404 名、平均年齢（標準偏差）: 45.4 (15.8) 歳、一卵性: 366 名 (90.6%)、男性: 88 名 (21.8%) であった。すべての抗酸化物質摂取量は短期記憶得点と有意な関連はみられなかった。遺伝・家庭環境要因を調整しても同様に有意な関連はみられなかった。ビタミン E 摂取量と年齢の交互作用項は短期記憶得点と有意な関連がみられ、その関連は遺伝・家庭環境要因を調整した後も同様であった。ビタミン E 摂取量別による層別解析では、摂取量が小さい群と比較して、摂取量が多い群では短期記憶得点への年齢の回帰係数が小さい傾向が認められた。

Discussion

本研究の結果は、乳製品摂取量と認知機能を検討した先行研究の結果を支持した。乳製品摂取と短期記憶の関連のメカニズムとして、認知機能低下のリスク要因でありかつ乳製品摂取が予防的効果を与える高血圧、糖尿病、ホモシステインが介在していると考えられる。限界としてサンプルサイズの小ささ、横断調査のため因果関係については言及できない点がある。抗酸化物質摂取量は短期記憶と有意な関連は認められなかった。しかし、遺伝・家庭環境に関わらず、短期記憶に対して年齢とビタミン E 摂取には交互作用があることが認められ、ビタミン E 摂取が加齢による認知機能低下を緩和する可能性を示唆した。

第 31 回日本双生児研究学会シンポジウム 「当事者が参加する学会の強みを生かして」

大木 秀一
石川県立看護大学健康科学講座

1. 本学会に参加する「当事者」とは誰か

多胎あるいは多胎児を対象とした研究領域には、①多胎そのものに関する研究（多胎の研究）、②遺伝と環境に関する研究（ふたごによる研究）、③多胎児ないし多胎家庭への支援に関する研究（多胎のための研究）がある。歴史的には、①と②は 100 年以上の歴史を持つ一方、③が固有の研究領域と認識されたのは比較的近年のことである。もちろんこれら 3 領域は完全に区別できるものでもないし、近接領域の知識が有用であることも多い。

当事者とは本来、ふたごないし多胎児自身のことを指すと思うが、本学会においてそのような参加者が多いとも思えない（確認もできない）。シンポジウムの企画意図は多胎育児支援を念頭に置いていると思われる。そのため、少なくともここでいう当事者とは「多胎の育児支援に関わる多胎児の親」を指しているのだろう。本論では当事者を「(多胎育児支援に関わる) 研究職、専門職ではない多胎児の親」として話を進める。該当する会員は、2010 年以降増加し、2016 年末現在、総会員数 119 人中 15 人 (TMC3 人、他 12 人) を占め 13% である。うち 3 人は 2015 年度以降の新規会員である (学会事務局会員名簿より)。

2. 当事者はこれまで本学会とどのように関わってきたのか

本学会での育児支援に関する研究・企画の変遷を表にまとめた。また、一般演題数の中で育児支援に関する演題数の割合を図にまとめた。

1991 年 (第 5 回) で又吉國雄先生 (元東京医科大学) が「アンケートにみる双子の母親の心理的側面—双子の母親のネットワーク作りに向けて—」で初めて育児支援に関連する演題を発表した。1994 年 (第 8 回) には、又吉先生の「双胎育児のあり方を求めて」において多胎サークルツインドリームが当事者として初めて連名となった。1999～2001 年、2004 年には一般演題とは「別室」で育児支援に関するワークショップが開催された。一般演題に占める育児支援に関する演題の割合は 2005 年 (第 19 回) が最も多く、半数を占めた。これは、大会長の志村恵先生 (金沢大学) が育児支援に重点を置いた学会編成 (当事者の発表も同室で実施など) としたためである。以降、当事者による発表が継続的に行われ今日に至る。

3. 当事者はこれから本学会とどのように関わっていけるのか

従来の保健医療系研究の課題として以下の 3 点を指摘できる。1) 実証研究中心、つまり質的研究よりも量的研究が、観察研究よりも介入研究・実験研究の方が重視される傾向にある。2) 当事者 (研究協力者) の視点が欠如しがちであり、研究協力者の真のニーズが (研究デザインにも結果の解釈にも) 反映されなかったり、得られた結果の現実的な「意味」の解釈が十分になされていない。3) 研究参加者に利益が還元されない。すなわち、研究と実践・臨床が乖離しても、特に問題視されることが少なかった。そのため、研究が「情報の搾取」とみなされたり、調査対象者にとっては「調査されるという迷惑」が起こりえた。これらは広い

意味で研究倫理の欠如にもつながる（対象者に利益が還元されない多量の質問、インタビューなど）。

それでは当事者が本学会に参加することでどのような効果があるだろうか。最大の利点は多胎研究参加者の協力機会が増えることである。1) 最近 20 年近く、多胎家庭は毎年全体の 1%程度の頻度で誕生しているが、地域ベースで多胎児あるいは多胎家庭の疫学研究を実施することは容易ではない。2) 質的研究であっても、特定の選択基準に合致する多胎児・多胎家庭などを複数獲得することは想像以上に難しい。3) 以上に加えて多胎育児中の母親は非常に多忙であり、研究に協力したくても実際には難しい。

ここで、ツインレジストリーと多胎育児支援組織の関係について考えてみる。ツインレジストリー構築は現在の双生児研究の主流であり、いかに大規模の双生児ペア（あるいは家庭）を登録し、疫学・臨床データを獲得するかが研究の成果に大きく影響する（ある意味研究そのものの価値に直結する）。そのため世界中の双生児研究者がツインレジストリー構築に向けた努力を組織的に行っている。ツインレジストリーと多胎育児支援組織の関係について述べる。1) 両者は構築目的が異なるが、多胎育児支援には育児の現状を示す情報（データ）が必要であり、データは多胎育児経験者からしか入手できない。2) 情報（データ）が少ない段階では適切な支援が何であるかの予想が付きにくい上に、（専門職も当事者も）経験談に基づく支援に陥りやすい。3) 支援の一環で情報提供をする場合に、多胎家庭を把握していないと効果的な情報提供はできない。つまり、情報収集と情報提供は表裏一体だということである。以上より、当事者を支援し研究参加へのインセンティブを高めつつ研究参加者を獲得することでレジストリーあるいはデータベースを構築するという方法が一つのアプローチとして考えられる。

多胎育児支援者が持つ「暗黙知」、支援を行う過程で得た「経験知」を調査研究に活用し、逆に調査研究を通じて経験知を「形式知として言語化」して当事者に還元すれば、当事者・研究者双方に有益なものとなる（Win-Win の関係）だろう。また、単に疫学研究にとどまらず、質的研究と組み合わせることで研究の厚みを増すことにつながる。

育児支援の実践と研究の関係を中心に述べたが、多胎に関する研究の 3 領域は互いに関連するので、結局は全ての領域の研究の向上に寄与する。本学会は当事者（潜在的な研究協力者）が参加する数少ない学会である。この貴重な機会を活用し、研究者が当事者の生の声やニーズに積極的に耳を傾け、また当事者は研究活動の現状や実際を知り歩み寄ることで、実践活動だけでなく研究テーマ・研究自体が大きく広がる機会が増えると考えられる。

本小論執筆の背景にある詳細な考察は以下の総説にまとめてあるので関心があればぜひ原典に当たっていただきたい。研究アシスタントの大間敏美さんの多大な協力を得た。

- 1) 大木秀一，彦 聖美：日本における多胎育児支援の歴史的変遷と今日的課題．石川看護雑誌，14，1-12，2017.
- 2) 大木秀一，彦 聖美：多胎家庭を対象とした育児支援と研究の両立．石川看護雑誌，13，11-20，2016.

表1 日本双生児研究学会における育児支援に関する研究・企画の変遷

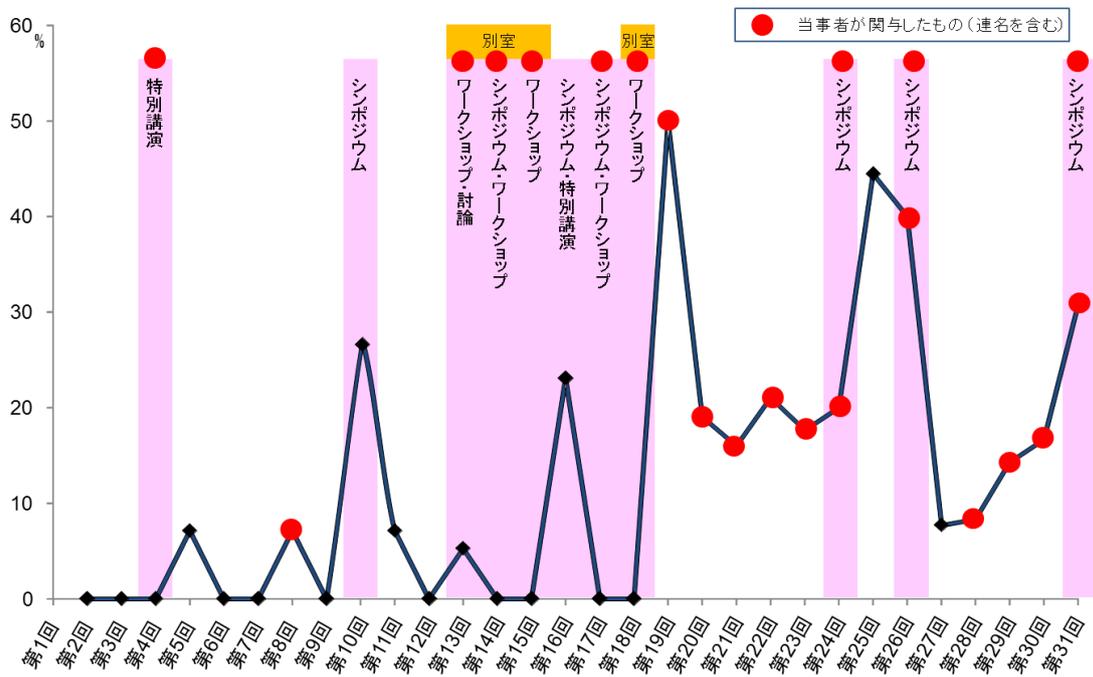
回数	年	多胎育児支援上の主な出来事	一般演題 (育児支援に関する演題数/一般演題数)	特別企画	詳細
第1回	1987年		なし		
第2回	1988年		0/12		
第3回	1989年	『ふたごの妊娠・出産・育児』 「被虐待児双生児症例の検討」	0/13		
第4回	1990年		0/14	特別講演	(レーネ・ロノウ氏)
第5回	1991年	関西ふたご研究会設立 保健所での多胎育児教室開始	1/14		
第6回	1992年	ISTS 東京で開催 日本公衆衛生学会自由集会での支援開始 『季刊誌 ツインズ』創刊 (~2002)	0/14		
第7回	1993年	『双子の母子保健マニュアル』(医学書院)	0/18		
第8回	1994年		1/14 (当事者と連名)		
第9回	1995年	厚生省心身障害研究 『多胎妊娠の管理及びケアに関する研究』(~1996) Twins-ML 設立 『多胎の医学と育児指導』(地域保健)	0/14		
第10回	1996年		5/18	シンポジウム	多胎家庭の Welfare とケアに関する研究 (5 演題: 医療2, 教育1, 研究1, TMC1)
第11回	1997年		1/14 (TMC と連名)		
第12回	1998年	『双子のお母さん』 (助産婦雑誌)	0/12		
第13回	1999年	多胎児の育児支援に関する要望書	1/19	ワークショップ (別室) 討論 (別室)	子育て支援 (7 演題: サークル 5, 病院 1, 研究職 1)
第14回	2000年	ベビーシッター派遣事業開始 『ふたごの育児』(厚生省) 『双子&多胎の本』(ベネッセ)	0/19	シンポジウム ワークショップ (別室)	私たちは双生児をどのようにみてきたのか (4 演題: 医療 2, 教育 1, 母親 1) 多胎育児支援 (4 演題: 研究職 2, 病院 1, 保健行政 1)
第15回	2001年		0/13	ワークショップ (別室)	多胎育児支援 (3 演題: サークル 1, TMC1, 保健行政1)

第 16 回	2002 年	『激増する多胎児家庭への育児支援』 (生活教育)	3/13	シンポジウム 特別講演	わが国における多胎育児支援について (4 演題: 保健行政 1, 病院 1, 研究職 1, TMC1) (エリザベス・ブライアン氏)
第 17 回	2003 年	多胎育児サポートネットワーク設立 『ツインズぷらす』創刊 (~2010) 多胎育児サークルリーダー研修会 (2003~2005)	0/9	シンポジウム1 シンポジウム2 ワークショップ	多胎サークルの将来像 (5 演題: Twins-ML) 多胎妊産婦を支える (4 演題: 研究職 3, TMC1) 多胎の子育て支援ワークショップ
第 18 回	2004 年	*この年から多胎児の親の参加費が半額に	0/14	ワークショップ (別室)	多胎児育児支援グループを元気に続けるために
第 19 回	2005 年	いしかわ多胎ネット設立 ひょうご多胎ネット設立	12/24 (当事者の発表2 当事者と連名2)		
第 20 回	2006 年	TMC 保健文化賞受賞 多摩多胎ネット設立 ぎふ多胎ネット設立 「多胎育児支援地域ネットワーク構築事業」 (WAM)	4/21 (当事者と連名1)		
第 21 回	2007 年	「多胎育児支援地域ネットワーク構築事業」 (WAM)	4/25 (当事者の発表1)		
第 22 回	2008 年	「多胎育児支援地域ネットワーク構築事業」 (WAM)	4/19 (当事者の発表1 当事者と連名3)		
第 23 回	2009 年	「多胎育児支援全国普及事業」(WAM) おおさか多胎ネット設立	3/17 (当事者の発表2)		
第 24 回	2010 年	日本多胎支援協会 (JAMBA) 設立	2/10 (当事者の発表1)	シンポジウム	研究者と協力者のよりよい関係を考える (4 演題: 研究職 2, TMC1, 当事者 1)
第 25 回	2011 年	えひめ多胎ネット設立	4/9		
第 26 回	2012 年		6/15 (当事者の発表1、 当事者と連名3)	シンポジウム	東大附属のふたごたち (シンポジスト: 4 組を含む 10 人のふたご)
第 27 回	2013 年		1/13 (当事者と連名1)		
第 28 回	2014 年	みやぎ多胎ネット設立	1/12 (当事者の発表1)		
第 29 回	2015 年	かごしま多胎ネット設立	2/14		

第 30 回	2016年	あきた多胎ネット設立	3/18 (当事者の発表1、 当事者と連名1)		
第 31 回	2017年	TMC 設立 50 年	4/13 (当事者の発表1、 当事者と連名1)	シンポジウム	当事者が参加する学会の強みを生かして (5 演題：研究職 3, TMC1, 当事者 1)

TMC : Twin Mothers Club (ツインマザーズクラブ)

Twins-ML : Twins and Supertwins Mailing List Japan



日本双生児研究学会一般演題数の中での育児支援関係の演題数の割合

「これからの『双生児学』について—会長就任に寄せて—」

安藤 寿康

(慶應義塾大学文学部・ふたご行動発達研究センター)

これまで会長がその就任に寄せて演説をぶったり、学会誌に巻頭言を寄稿したりして、抱負を表明するといった偉そうな慣習などないのがよかったこの学会ですが、近年、ニューズレターの原稿の集まりが芳しくないことを、新しいニューズレター担当の廣瀬先生、福島先生に知らされたこともあり、また私自身、このところニューズレターへの貢献が少なくなっていることへの反省、そしてこの機に「双生児学」とは何なのかを考えてみたいという、自分自身のモチベーションもあって、このたびあえて一文を寄せさせていただくことにいたしました。ここでは慣習として品胎(三つ子)以上のすべての多胎児も含んだ総称として「双生児」という言葉を用います。

「双生児学」Gemellology (Gemellologiae)ということばは、多くの一般の人たちにとってなじみのあるものではないと思いますが、これ自体はれっきとして存在する学術用語です。1952年創刊の歴史ある *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae* という学術誌があり、1979年からはさらに *Acta Geneticae Medicae et Gemellologiae: Twin Research* になって、それに井上英二先生や今泉洋子先生らが編集委員として長年かわり、私も含めた多くの日本人の双生児研究者が寄稿していたこと、それが1998年から *Twin Research and Human Genetics* という新しい名称に生まれ変わって今に引き継がれていることは、この学会の一定年齢以上の方々の記憶にあるところでしょう。

しかしこの名前を冠した学部や学科を聞いたことはありませんし、講座やテキストがあるわけでもないでしょう(と思います。どなたかご存知ですか? なさってますか?)。これは双生児に関する学術的研究の成果報告を持ち寄って交換する「場」としての学問名といえそうです。ちょっとしゃれた言い方をすれば「アゴラ(広場・集会所)」でしょうか。つまり体系化されたディシプリンとしての「学」というよりも、関心や対象を双生児とする人たちの集いとしての「学」なのです。

学問の専門化・細分化が進むにつれ、そして研究者がインパクトファクターの少しでも高い学術誌に成果を発表することが求められるにつれ、このようなアゴラとしての学の存在価値が低く見積もられるようになってきました。いや、低く見積もられているわけではないでしょう。実際にイノベティブな、知的にワクワクするような経験ができるのが、こうした異分野・異業種の人々が集まって、自由にワイワイやる場であることは、おそらく多くの人たちが経験していることだと思います。しかしそのための精神的・時間的ゆとりがなくなってきたというのが、少なくとも私の実感です。これは40年以上も前のミヒャエル・エンデの『モモ』に「時間どろぼう」として描かれていた光景さながらです。

双生児学が、「ふたご(双生児)の、ふたごによる、ふたごのための」研究からなるという言い方は、私たちがいつも双生児研究を対外的に紹介するときの決まり文句として使います。わが国でも、もともと何のアゴラもなかった1980年代半ばころは、双生児にかかわっていた医学

者も心理学者もふたごの親御さんたちも、とにかく集える場を作りそこに集まろうとしました。それがこの日本双生児研究学会です(ニューズレターの本号、大木氏稿参照のこと)。

しかし今日、ふたごの親御さんが集える場はそれぞれの地域にコミュニティーとして、あるいはバーチャルなネットワークとして活発になされるようになり、研究者は細分化された学会や専門誌において、それぞれ独自の研究発表の場が与えられるようになりました。つまり双生児学が衰退したのではなく、もはやひとつのアゴラに集まってワイワイすることのできないくらいの規模に拡大し分化してしまっているのです。

私自身がかかわる分野でも、心理学系中心の Behavioral Genetics の学会で見る顔と、医学系中心の The International Network of Twin Registries (INTR) の顔ぶれには、かなりのズレが目立つようになってきました。いまのところできるだけ両方に顔を出そうと努めていますが、心理学者として医学系の集いにいると、「お客さん」感、“away”感が否めません。いや、専門の行動遺伝学会に出ても、GWAS(genome-wide association study; 全ゲノム関連研究)や GCTA(genome-wide complex trait analysis; 全ゲノム複雑形質解析)といった分子生物学の手法を使った巨大な双生児研究をみると、「こりゃ、とても、たちうちできん…」(国際学会でのこの心のつぶやきは、実のところこの業界に入ってからずーっとつぶやき続けてきたものですが)と思わされ、それでも何とかどこかにつかまって距離を離されないようにし、あわよくば「1周遅れのトップの座」を狙えないかともがきつづけています。そんな中で、世界中のあちこちで立ち上がっているさまざまな名前を冠した「なんちゃら Twin Study」を見て、われわれよりはまだ小規模の、かつての自分たちを見ているような研究発表に出会ってとちょっと安心する、そしてうかうかしているうちに抜かされる…そんなありさまです。

とてもかつての牧歌的なアゴラとしての「双生児学」の気分を味わうどころではありません。

ではそういう「双生児学」はもはや過去の遺物なのか。存在意義は本当はないのだろうか。「いや、だからこそ、双生児学が必要だ」
月並みな言い方になりますが、この月並みなせりふを月並みにしないためにはどうすればいいのでしょうか。

基本は初心に帰ることしかないと思います。行動遺伝学者や医学研究者は、アンケートや実験や検査で得られた双生児の数値データをいじるだけではなく、そのデータを生み出してくれた双生児の生き様を当事者の言葉や姿から知る、双生児の子育てで手一杯の親御さんをはじめご家族の方も、双生児について得られ続けている科学的発見の成果を知る、また双生児の遺伝と環境の特殊な条件がどのように生命科学や人文社会科学の諸問題に貢献しているかを知る。その知り方は、それぞれの専門的な場で知る知り方とは異なることは明らかです。場合によっては、さっぱりわからない、どこが面白いのかわからない、なぜそんなことをするのか分からない…というような知り方を強いられるかもしれない。発せられる質問や意見が、当面の自分たちの仕事を進める上で、まったく頓珍漢な、無理解・無意義と感じられてしまうようなものかもしれない。

しかしそれを経験することを避けてはいけないのではないのではないのか。

「諸悪の根源は無知である」これも言い古された箴言ですが、ならばそれに素直に耳を傾けてみましょう。双生児にかかわって生きている私たちは、双生児を取り巻く状況の全貌を眺める視点に立つことがやはり必要です。どんなに双生児学の外延が広がったとしても、どこか

でその全体像を垣間見る瞬間に立ち会って、その印象を心に刻み込むことが、無知からくる過ちを避けるための最小限にして最良のきっかけとなるはずだからです。それが年一回の学術集会と年二回の研究会(が実現されなかった年が何回かあったのは私の怠慢によるところが大きい、すみません)、そして同じく年二回発行のこのニュースレターです。

果たして今の学会が、その「全貌」を取り込んでいるのでしょうか。私の専門領域に限っていても、双生児をあつかった行動遺伝学的・医学的研究を發表していながら、この学会にまったくかかわっていない研究者を何人も知っています。そういう人たちに、学会への正式入会を求めなくとも、一度は發表してもらい機会を与えてもいいのではないかと考えています。双生児はじめ多胎児とそこご家族を取り巻く生活社会的状況や問題も、きちんと紹介されているのか、見逃され表現されていないものはないのだろうか、行政側の意見も知る必要があるのではないかと、ぜひリーダーの感度を上げていきたいと思ひます。

双生児に関する知見がきちんと社会に発信されているかを見極め、必要な情報を発信する源になることも学会としての役割でしょう。たとえば、いまだに産科で胎盤数を卵性の判断基準だと信じて、胎盤ひとつなら一卵性、二つなら二卵性と伝えているところが多いのはどうしたものでしょう。いまや100出産に一回の双生児出産率、数にして50人に一人は双生児という事実、二卵性双生児の人たちが一卵性ほど確固とした双生児としてのアイデンティティをもてずにいることをどれぐらいの人たちが知っているのでしょうか。

いま創元社という出版社が、慶應義塾ふたご行動発達研究センターのこれまでの業績を一連の一般向け叢書として出版してくださる企画が進行中なのですが、私はこれをこのプロジェクトの成果だけでなく、この学会の成果の社会的発信の場として拡大したいと思っており、すでに何人かの先生方に執筆のご相談をさせていただいています。双生児学のプレゼンスをもう少し広げてみたいのです。

そして最後に重要なことは、双生児研究の国際的動向、具体的にはゲノム、エピゲノム研究のための貴重な基盤としての大規模双生児レジストリーの構築とそれを基にしたさまざまな双生児研究推進のための母体を、学会として支えるように考えたいと思ひます。その皮切りとして、慶應義塾ふたご行動発達研究センターと大阪大学ツインリサーチセンターの東西ふたつのセンターを連携したコンソーシアムを作ること、いまのところ学会とは独立に進めています。まだ餅の絵を描いている段階ですが、双生児の方々およびそこご家族にご迷惑をかけることの極力ないよう、適切に連携しながら、日本からの本格的な研究成果を発信し続けられるようなしくみを作ること、いずれは学会の事業としてみなさんと進められるようにできればよいと思ひています。

このときに必要なのが、新しい「双生児学」のビジョンだと思ひます。確かに「場」「アゴラ」としてしか存在していなかった「双生児学」ですが、それぞれに分散した活動とそこから生み出された知識は、おたがいに持ち寄ると、何か新しい知識が生まれる可能性がある。「知識は生殖(セックス)する」というマツ・リドレーの表現を、下品と捕らえるか刺激的と捕らえるかは人それぞれの感性・美学・価値観でしょうが、まったくかけ離れたと思われた知識と知識が融合して、それまで解決できなかった問題の出口が見つかり、新しい文化を生み出してきたのが人類の歴史です。このことは「エロス」の哲学的意義を論じたソクラテス(プラトン)の対話にも描かれています。双生児のきょうだいの日常的な悩みとエピジェネティクス研究が

どこかで結びつくかもしれない。双生児家庭の親子関係は、今日のあらゆる家族問題のひとつの典型をはっきりと描いているのかもしれない。今の私の貧しい頭ではたいした「生殖」は思いつきませんが、この学会の学術集会や研究会ではしばしばそんなことが可能なのではないかという感触を得ることがあります。

そんなときに、いわゆる閉じた体系化されたディシプリンとしての「学」ではないけれども、双生児の諸学・諸状況を俯瞰するプラットフォーム、のみならず双生児と非双生児、双生児とそれを取り巻く社会全般の関連を見渡すことのできる枠組みが、やはり必要になってくるように思われるのです。その核になるのは、この学会の会員ひとりひとりの双生児に対する関心と、それぞれの専門性の確かさ、そしてお互いに行っていることを理解しようとする敬意に根ざした好奇心と想像力でしょう。

ものを書き出すと、つい大言壮語をはいてしまう悪い癖が、ここでも出てしまいましたが、魅力的な「双生児」という存在の可能性を、日本双生児研究学会を触媒として少しでも豊かなものにできるように、わずかばかりですが、力を尽くしたいと思っています。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

.....

<日本双生児研究学会 第37回学術研究会のお知らせ>

日 時 : 2017年8月18日(金)

場 所 : お茶の水女子大学文教育1号館大会議室 (地図↓ ④番)

研究会 13:00-15:00

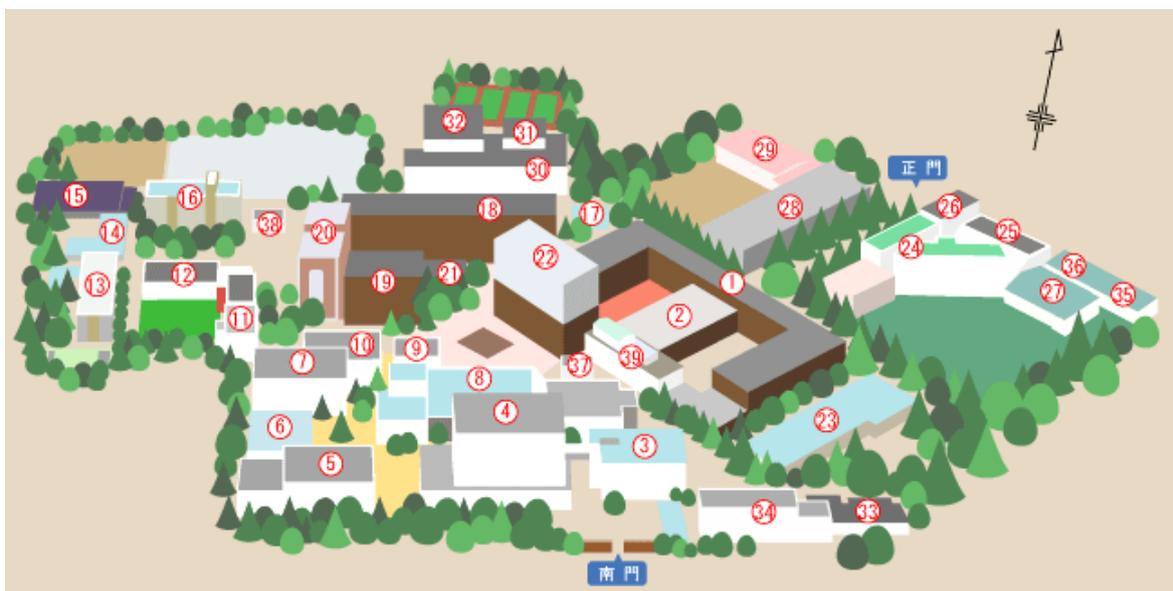
(幹事会 15:00-16:30)

講演者: カーリ・シルベントイネン博士

演 題: 「The power of collaboration: lessons learned from the CODATwins project」

司 会 : 横山美江先生(大阪市立大学)

※ 当日、通訳があります。



＜日本双生児研究学会 第32回学術講演会のご案内＞

1. 日時：2018年1月27日（土） 9：30～16：00（予定）
2. 場所：大阪大大学院医学系研究科（大阪大学吹田キャンパス）
大阪府吹田市山田丘2-2
*講演会会場は次号にて詳細を案内いたします。
3. 講演会の概要（予定）
 - (1) 9：30～12：00 午前の部（一般演題）
 - (2) 12：00～13：00 昼休み・幹事会
 - (3) 13：00～13：30 総会
 - (4) 13：30～16：00 午後の部（一般演題、シンポジウム）
 - (5) 16：30～18：30 懇親会 ※予定、詳細は次号にて案内いたします

4. 演題申し込み

学術講演会での発表を希望される方は、演題名・発表者名・全員の所属先・発表要旨（600～1000字程度）をA4用紙1枚にまとめ、郵便またはEメールに添付して下記送付先までお送りください。この要旨原稿は、原則としてそのまま抄録集の印刷用原稿として用います。

[送付先・お問い合わせ]

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7 大阪大学 ツインリサーチセンター

Eメール： abstract@twin.med.osaka-u.ac.jp

[締め切り] 2017年11月12日（日）

5. 交通ご案内



千里中央駅から

- 大阪モノレール万博記念公園駅で彩都線（同一ホーム）に乗継ぎし、阪大病院前駅下車。キャンパス内徒歩約 10 分
- 阪急バス阪大本部前行き、または茨木美穂ヶ丘行きに乗車し、「阪大本部前」または「医学部前」バス停で下車。キャンパス内徒歩約 7 分

JR 京都線 茨木駅、阪急京都線 茨木市駅から

- 近鉄バス阪大本部前行きで「阪大本部前」または「医学部前」バス停で下車。キャンパス内徒歩約 7 分

大阪モノレール

- 万博記念公園駅で彩都線に乗り換え阪大病院前下車。キャンパス内徒歩で約 10 分

阪急千里線 北千里駅から

- 徒歩で東へ約 30 分。

<総会・幹事会報告>

日 時：2017 年 1 月 28 日（土）12:00～13:00

場 所：十文字学園女子大学 9 号館 9415 教室（埼玉県新座市菅沢 2-1-28）

出席者：安藤寿康、大木秀一、志村恵、菅原ますみ、野中浩一、早川和生、横山美江、天羽千恵子（監事）

欠席者：加藤則子、廣瀬英子、山形伸二

議題：報告事項

1. 第 31 回学術講演会の開催状況について：加藤則子学術講演会長より現在までに 32 人の参加との報告があった。2. 2016 年の活動報告

1) 志村編集委員長より、ニュースレター第 60 号および第 61 号を予定通り発行したとの報告があった。

2) 会員状況報告 2016 年 12 月末現在

現会員数 119 名（うち 2016 年新規入会者 9 名、名誉会員 6 名、会費長期未払者 3 名）
退会者 6 名（死亡 1 名、退会連絡有 3 名、休会 1 名、宛先不明 1 名）

3) 2016 年は研究会の開催はなかった。

4) 学会 Web サイトを開設した。 <http://jsts.jp.net/>

5) 奨励賞の受賞者決定について

応募締切日（9 月 15 日）までに早川会長より推薦のあった候補者 1 名について、奨励賞選考委員会（安藤寿康、野中浩一、加藤則子）が慎重に審議した結果、奨励賞の授与が適格であると全員一致で判断され、幹事会としても異議なく了承した。

奨励賞受賞者：尾形宗士郎氏（日本学術振興会 特別研究員）

6) 2017年～2019年の新幹事選出の選挙結果について

大木秀一選挙管理委員長より幹事選挙結果について報告があった。

2016年11月11日115名に発送（被選挙人は102名）

2016年11月30日必着

2016年12月5日開票（大木幹事、志村幹事、前川会員）

返信は61通（有効59通、無効2通 [9名以上に丸印、締切後到着]）

有効返信率51%（59/115）

幹事会において、集計結果の上位9名および会長推薦3名を加えた下記12名を新幹事とする予定であることが了承された。福島会員と廣瀬会員に関しては、早々に本人から承諾を得ることとなった。

大木秀一、安藤寿康、早川和生、加藤則子、志村恵、横山美江、野中浩一、天羽千恵子、本多智佳、菅原ますみ、福島昌子、廣瀬英子

7) 新学会長について

総会での承認後、新学会長を安藤寿康幹事とすることが確認された。また、新幹事で事務局、ニューズレター編集、研究会開催、メーリングリスト管理、Webサイト管理などの担当役割分担を決めることが検討された。Webサイト管理は引き続き事務局が担当し、研究会開催は菅原幹事が、メーリングリスト管理は天羽幹事が担当することとなった。ニューズレター編集は、幹事として福島・廣瀬両名が幹事就任を承諾した場合に、担当をお願いすることとなった。

8) 2016年の会計収支報告及び監査報告（別紙）

3. 2017年の活動予定について

- 1) ニューズレター第62号、第63号を発行予定
- 2) 研究会の開催
- 3) 日本双生児研究学会奨励賞の募集
- 4) 日本双生児研究学会名誉会員の推薦
- 5) 2017年の予算案について（別紙）

事務局より提案された2017年予算案について審議され、事務局経費（人件費等）を12万に増額することを含め、異議なく承認された。

4. その他

- 1) 第33回学術講演会長として横山美江幹事が推挙され幹事会にて全会一致で承認された。
- 2) Webサイトへの掲載内容について審議され、最新の1年分を除く過去のニューズレターをPDFで掲載することとなった。
- 3) 会員名簿、メーリングリストの更新のため会員情報の確認を今年度行うこととなった。

<日本双生児研究学会 2017年 総会議事録>

日 時：2017年1月28日（土）13:00～13:30

場 所：十文字学園女子大学 9号館 9417教室（埼玉県新座市菅沢 2-1-28）

幹事会議事録に準ずる。

奨励賞の受賞が行われ、受賞者の尾形宗士郎氏に賞状と副賞が贈られた。

安藤寿康氏が新学会長に就任することが承認された。

日本双生児研究学会 平成28年(2016.1.1～2016.12.31)会計収支報告

収入		支出	
前年繰越	1,569,798	ニュースレター印刷費(59,60号)	69,806
		ニュースレター郵送費(59,60号)	17,818
会費収入		幹事選挙関連費	19,983
平成24年度年会費(2)	6,000	第31回学術講演会援助費	100,432
平成25年度年会費(6)	18,000	幹事会費用	7,700
平成26年度年会費(12)	36,000	ホームページ関連費	215,182
平成27年度年会費(31)	93,000	事務局人件費(27,28年)	112,000
平成28年度年会費(77)	231,800	通信費	720
平成29年度年会費(1)	3,000	消耗品費	800
利子	156		
		次年繰越金	1,413,313
収入合計	1,957,754	支出合計	1,957,754

以上 相違ありません。

平成 29年 / 月 23 日

監査 天羽 千恵子



監査 前川 浩子



日本双生児研究学会 平成29年(2017.1.1～2017.12.31)会計予算案

収入		支出	
前年繰越	1,413,313	ニュースレター印刷費(61,62,63号)	120,000
		ニュースレター郵送費(61,62,63号)	50,000
会費収入		ニュースレター編集費(28,29年)	60,000
75人(116*0.65)*¥3,000	225,000	研究会講演者謝金	20,000
過年度会費25人*¥3,000	75,000	研究会講演者交通費	30,000
		研究会会場使用費	5,000
利子	200	第32回学術講演会援助費	100,000
		会議費(幹事会)	10,000
		奨励賞関連費	55,000
		ホームページ関連費	35,000
		事務局人件費	60,000
		消耗品費	5,000
		次年繰越金	1,163,513
収入合計	1,713,513	支出合計	1,713,513

<2017年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者推薦方法について>

2017年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者がありましたら、2017年9月末日までに下記選考規程によって御推薦ください。

日本双生児研究学会 奨励賞選考規定

・ 設立目的

日本双生児研究学会奨励賞は、不断に亘る真摯な研鑽により優れた研究業績をあげている本学会会員を顕彰することにより、我が国の双生児研究の領域における学問水準の飛躍的向上を図ることを目的とする。

・ 受賞候補者の資格

日本双生児研究学会の会員で、応募締切日に原則として45歳未満であること。

・ 対象となる研究業績

双生児研究に関する独創的研究で、将来の発展を期待しうるもの。研究業績は、国際誌に掲載されているか、日本双生児研究学会学術講演会で口演後に学術雑誌に掲載されていること（受理されていても未刊行のものは含めない。）

・ 推薦方法

原則として幹事が推薦し、推薦できる人数は1年につき1名とするが、自薦も可。推薦者は、受賞候補者に関する下記の書類（論文別刷以外の書類はA4版の大きさの用紙に横書きに記載したものとする。）各4部を9月末日までに日本双生児研究学会事務局に提出する。

- 1) 受賞候補者の氏名、所属、所属先住所、略歴、関連論文目録
- 2) 業績の概要（A4版用紙1枚程度に纏めること）
- 3) 受賞対象となる研究業績に係わる論文の別刷

・ 受賞

- 1) 選考委員会の推薦に基づいて、幹事会が12月15日までに決定する。
- 2) 受賞者は原則として1名とする。
- 3) 受賞者には賞状および副賞を贈呈する。
- 4) 授賞は、日本双生児研究学会学術講演会の総会において行われる。
- 5) 選考委員会は別に定める。

日本双生児研究学会 会員用新メーリングリスト運用開始のご案内

2017年8月より、会員用新メーリングリスト（以下ML）の運用を開始する予定です。会員間の情報交換や交流にどうぞご活用ください。

◎登録方法

MLへの登録を希望される方は、学会ホームページのお問い合わせフォーム

<http://jsts.jp.net/contact/>からご連絡ください。区分は「その他」を選び、お問い合わせ内容に「ML登録希望」として、①お名前、②メールアドレス、③所属等の3点をお知らせください。

◎配信の停止・変更

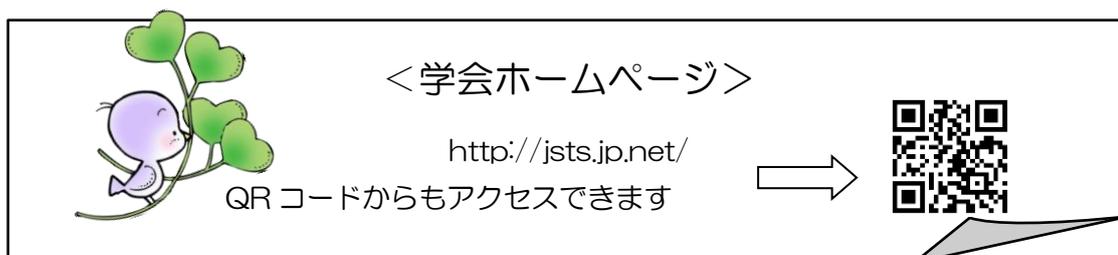
配信の一時停止、再開や登録メールアドレスの変更などは、学会ホームページのお問い合わせフォーム<http://jsts.jp.net/contact/>でその旨をお知らせください。

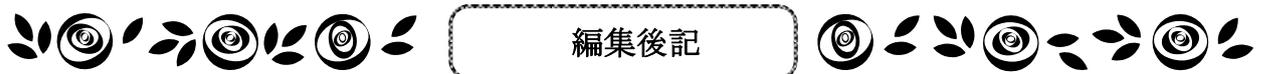
◎利用上の注意

- ・MLでは、返信も含めて、①送信者の氏名、②アドレス、③本文が、ML登録会員全体で共有されることをご承知おきください。
- ・MLではファイル添付を制限しておりませんので、コンピュータウィルスに対しては各自で防衛してください。
- ・携帯アドレスでの登録の場合は、別途受信設定が必要となる場合があります。なるべくPCで受信できるアドレスをお知らせください。

お知らせ

※ 振込用紙を同封いたしましたので、年会費の振り込みをお願いします





編集後記

今年も猛暑の予報が出ております。みなさまお元気でご活躍のことと存じます。今年度より学会ニュースレターを廣瀬英子、福島昌子の二人で担当をさせていただきます。不慣れなもので、至らぬことも多いかと存じますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

今回の62号では、学会奨励賞受賞講演、第31回学術講演会シンポジウム記録、安藤寿康学会長からの寄稿、そして、第37回研究会、来年1月の第32学術講演会の案内を編集し『ニュースレター』をお届けいたしました。今後、第32回学術講演会への演題、国際雑誌、国際学会などの抄録をお寄せいただけますと幸いです。これまでの会員のみなさまのご協力に感謝しますとともに、今後ともどうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

暑さ厳しき折、お身体をご自愛くださいませ。

編集委員：廣瀬英子（上智大学）

福島昌子（東京大学教育学部附属中等教育学校：以降の略 東大附属）